

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：37402

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K14080

研究課題名（和文）「自律を目指す教育」に関する自然主義的研究 情動の合理性に着目して

研究課題名（英文）A Naturalistic Research on Education Aiming for Autonomy: Focused on Rationality of Emotion

研究代表者

宮川 幸奈 (MIYAGAWA, Yukina)

熊本学園大学・経済学部・准教授

研究者番号：90806035

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、教育哲学の重要な研究課題である「自律を目指す教育」の在り方に関し、自然主義的な探究（科学的知見や科学的方法を積極的に用いた哲学研究）によって、新たな理解を得ようとするものである。とりわけ情動の合理性に関する科学的研究を参照することによって、理性や意識と、感性・情動や無意識という一見対立する諸要素が、自律という教育目的の中で絡み合うことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、無意識的な感性・感情・情動が、従来の教育哲学研究において想定されていた以上に、教育目的としての自律に関わっていることを明らかにした。人間諸科学において、情動のメカニズムやその発達、進化等についての知見は今後さらに積み重ねられていくことと思われる。今後発展が見込まれる科学的研究と、自律を目指す教育に関する（教育）哲学的研究とをつなぐ道を整備したという点において、本研究は教育哲学上の意義を有すると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to present a renewed understanding of education aiming for autonomy, one of the important themes of philosophy of education, through naturalistic inquiry which is a style of philosophy using scientific knowledges and methods positively. Especially by referring scientific researches on rationality of emotion, this research elucidates that reason or consciousness and sensibility, emotion or unconsciousness are connected with each other in autonomy as the aim of education though they seem opposed.

研究分野：教育哲学

キーワード：自律 教育 自然主義 情動

1. 研究開始当初の背景

被教育者の自律、すなわち被教育者が自ら立てた規範に従って行為することは、近代以降の教育(学)が教育目的として掲げてきたことの一つである。20世紀後半の人間諸科学やいわゆるポストモダンの諸言説は、人間が自律的な主体であるという見方に対して異議を申し立ててきた。しかしながら、そうした批判によって被教育者の自律という教育目的が捨て去られることはなく、むしろますます強調されている。

教育哲学の領域内でも、教育目的として掲げられる自律の内実や、「自律を目指す教育」の在り方は、重要な研究課題であり続けている。近年の諸研究でも、カント(I. Kant)が定式化した自律と他律のパラドックス(未だ自律していない子どもを自律させるためには教育という他律が必要だが、「自律せよ」という他者の命令に従う限り子どもは他律状態から抜け出すことができないということ)に取り組みつつ、「自律を目指す教育」の仕組みを解明することが試みられている。

他方、心理学や脳神経科学では、諸個人の行動や意志決定が、外部環境や他者の影響を受けながら生じるメカニズムが様々に探究されている。このような科学的探究は、人間的な自律を否定するものとして受け止められることがある一方で、人間らしさを解明するための有力な方法として期待を寄せられてもいる。哲学の中でも、科学的知見や科学的方法を用いながら哲学をしようとする自然主義 naturalism の立場が、1960年代末のクワイン(W. V. O. Quine)の提起以来、英語圏を中心に盛り上がりを見せている。とりわけ、認知科学(心のはたらきを情報処理の観点から解明することを目指す、哲学・心理学・脳神経科学・人工知能研究などにまたがる学際領域)に参画する哲学者たちは、人間の心や知性をめぐる哲学的議論に、科学的知見を踏まえて新たな視点をもたらしている。こうした自然主義的な探究は、「自律を目指す教育」の理解を深めることに大いに資するものと考えられるが、教育哲学領域では未だ注目を集めていない。

以上のような状況の中で、研究代表者は、「自律を目指す教育」をめぐる教育哲学研究を進展させるにあたって、自然科学の知見や方法を積極的に参照することが有効だと考えた。とりわけ、情動 emotion が合理性を阻害するものではなく、むしろ促進するものであるという認知科学由来の知見は、理性のはたらきを中心に据えてきた教育哲学における自律のとらえ方の再考を促すインパクトを有するだろうという見通しの下、本研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究の目的を、自然主義的な探究によって、「自律を目指す教育」に関して新たな理解を得ることと設定した。具体的には、情動に関する認知科学的知見を踏まえ、自律と情動の関係を検討するとともに、「自律を目指す教育」の在り方を、被教育者の情動へのはたらきかけという観点からとらえ直すことを目指した。

3. 研究の方法

(1) 情動のメカニズムと、その合理性に関する諸研究の検討

認知科学的研究やそれに基づく自然主義的哲学の研究は、人間と他の生物の連続性に着目し、情動が有する合理性を明らかにしつつある。そこで、情動に関する代表的な諸研究が、それぞれどのような情動のメカニズムを想定しており、それによって合理性がどのようにとらえ直されているかを検討した。具体的には、神経学者のダマシオ(A. Damasio)の諸著作や、感情心理学や社会心理学の諸研究を検討した。さらに、それらの研究動向を踏まえた自然主義的哲学の研究として、プリンツ(J. Prinz)の著作や、心の哲学の領域で情動に焦点を当てている諸研究も精査した。

(2) 情動の学習に関する諸研究の検討

情動に関する諸研究の中では、人間において情動は学習されるものであるのかどうか一つの論点となってきた。情動のメカニズムとして進化的に獲得された身体的反応を重視する立場から、情動は学習されるものではなく生得的なものだという主張がなされてきた(生得主義)。これに対して、人間の情動の経験には個人差や文化差が大きいことを指摘し、情動が社会の中で学習されると主張する論者も多い(構成主義)。さらに、生得主義と構成主義の単純な対立を超えて、一定の生得的な条件の下で学習が生じるメカニズムを探ろうとする研究もある。それらの研究を収集し、内容を精査した。

(3) (1)(2)を踏まえた、「自律を目指す教育」のとらえ直し

(1)(2)の作業を踏まえて、教育目的としての自律に、情動的な側面がどのように含み込まれているかを検討した。また、「自律を目指す教育」が持つ、被教育者の情動にはたらきかける側面について考察した。

(4) 人文学・社会科学における近年の感情・情動研究の動向の検討

当初の計画に加え、人文学・社会科学における近年の感情・情動研究の動向を探る作業に取り

組んだ。例えば、歴史学の領域において、人々が有してきた感情について、その表出や認識のされ方の変遷を探る研究(感情史研究)が、今日注目を集めている。感情史研究においては、感情・情動に関する(自然)科学的知見が積極的に参照されている一方で、その安易な援用を自己批判する動きもある。こうした動向を踏まえて、感情・情動に関する(自然)科学的知見を採り入れながら教育哲学研究を進めていくことの意味について改めて検討した。

4. 研究成果

本研究の成果は、博士論文「自律を目指す教育に関する自然主義的研究」(2019年)及び著作『自律を目指す教育とは何か—自然主義的な教育哲学の試み』(2022年)にて発表した。これらは全体として、人間諸科学の知見と整合するかたちで「自律を目指す教育」を理解・説明するべく、「自律を目指す教育」を前述のパラドックスとは異なる枠組みによってとらえ、その内実を探究したものである。以下では、これら内容のうち、情動の合理性に着目するという本研究の目的に特に関わる部分について述べる。

(1) 理性や意識と、感性・情動や無意識という一見対立する諸要素が、自律という教育目的の中で絡み合う様を描き出したこと

教育哲学領域でも、自律の感性的・情動的な側面に言及する研究が現れているものの、自律に関する議論の全体的な傾向としては、依然としてその中心に据えられているのは理性のはたらきである。ここには、理性や思考と感性や情動を対比的にとらえ、前者に合理性を、後者に非合理性を割り振るような図式—その典型がカントの自律論である—を見て取ることができる。そして、自律を自己の理性的な部分による制御ととらえることは、多くの場合、自律を意識的な営みととらえることにつながっている。

本研究では、近年の情動に関する認知科学的研究や、それに基づく自然主義的哲学の研究を取り上げて、上記の図式を問い直した。例えば、ダマシオが唱えるソマティック・マーカー仮説は、合理的な意志決定のためには情動が不可欠であることを示そうとするものである。これらの知見を踏まえて、私たちが合理的に生を営むことができているとき、理性と情動はおおむね調和してはたらいっていることを確認した。理性と情動の協働によって合理性が実現されているとき、私たちは理性と情動のどちらがある意思決定や行動に関与しているかを見分けることができない。この場合、主観において理性と情動が分かちがたく結びついていることが、合理性を支えていると言える。

加えて、心理学者たちの中で交わされてきた情動と認知の関係に関する論争(とりわけ、ザイアンス(R. Zajonc)とラザルス(R. Lazarus)の間で交わされた「認知が先か感情が先か」論争)を検討し、情動は意識的な側面と無意識的な側面の両方を有していることを確認した。

以上のように、自律概念と関連づけられる理性と感性・感情・情動などの区別がそもそも曖昧であり、なおかつ、その区別と意識と無意識の区別の対応関係も揺らいでいることを明らかにした。それを受けて、教育目的として掲げられている自律は、意識的な理性のみによって実現されているものではなく、理性と情動の両方によって実現されており、そこには無意識的な営みも大いに関わっているのだと論じた。

(2) 心理学史の観点から、理性的であることと感性的・情動的であることの区別と、「自律を目指す教育」との関わりを明らかにしたこと

(1)で明らかにしたように、理性と感性・感情・情動などの区別はそもそも曖昧である。しかしながら、教育哲学の議論のみならず、一般的にも、自律とは理性のはたらきによるものだととらえる傾向は強い。そこで、理性的であることと感性的・情動的であることの区別が私たちにとってどのような意味を持っており、それが「自律を目指す教育」とどう関わっているのかを考察した。

手がかりとして参照したのは、心理学史研究者のダンジガー(K. Danziger)の見解である。ダンジガーは、19世紀に情動という語が普及するまでは非常に重要であった情念 *passion* という語について、古代ギリシャから近世に至るまでの主だった用いられ方を検討している。それによれば、情念の区分の仕方やその原因についての見方はさまざまであるものの、個人の中に制御する部分と制御される部分を見出し、前者を理性、後者を情念とみなすという枠組み自体は維持されてきた。ダンジガーは、理性と情念の区別が様々に論じられてきたこと、すなわち個人の中の制御する部分と制御される部分の区別について理論化の努力が重ねられてきたことが、自己の制御や管理が人間にとって重要であり続けてきたことの証左であると見ている。

本研究では、ダンジガーの見解を敷衍し、現代の人間諸科学においても、個人を制御する部分とされる部分に二分する発想は失われておらず、自己の制御や管理が重要であり続けていることを確認した。現代の人間諸科学において、理性と主に対比されているのは情動である。(1)で述べたように、現代の人間諸科学は、理性と情動等の境界の曖昧さをますます明らかにし、さらに理性と意識、情動と無意識の対応関係も揺るがせている。それでも、意識的な理性を個人の中の制御するものに、無意識的な情動を制御されるものに割り当てる図式は大枠では維持されており、それによって、自己が自己を制御・管理するという見方が確保されている。言い換えれば、自己が自己を制御・管理するという見方を確保するためには、分かちがたいはずの理性と情動等を区別する必要があるということである。

この考察を経て、「自律を目指す教育」には、理性と情動等を異なるものとして区別することによって、自分で自分を理性的に制御しているのだと感じながら生きるように促すことが含まれているのだと論じた。

(3) 「自律を目指す教育」の、被教育者の情動にはたらきかける側面を明らかにしたこと

「自律を目指す教育」に、被教育者の情動にはたらきかける側面があることを明示するために、「システム1のための教育」と「システム2のための教育」の区別を導入した。

システム1及びシステム2とは、人間の認知に関する理論として支持を集めている二重過程理論 dual process theories の用語である。二重過程理論とは、人間の心のはたらきを認知・情報処理のための2つのシステムによって説明する理論であり、そこでは直観的で意識のはたらきを必ずしも必要としないシステム1と、熟慮的で意識のはたらきを必要とするシステム2が想定されている。システム1は、進化的に古く、ヒトが他の生物と共有しているものとされる。それに対して、システム2を少なくとも発達した形で備えているのはヒトのみだとされている。人間の理性と言い表されてきたものはシステム2と重なっており、感情や情動、衝動などと言い表されてきた心のはたらきは、システム1により近い。

意識的な理性のはたらきを中心に据えた従来の議論においては、被教育者を自律させるための教育者のはたらきかけとして、「自律せよ」と命じて熟慮を促すこと(システム2のための教育)が主に想定されてきた。それに対して、情動の合理性やその学習に関する諸研究を踏まえて、被教育者のうちにその社会で適切とされる直観や情動を育む教育者のはたらきかけ(システム1のための教育)もまた、「自律を目指す教育」のうちに含まれているのだと論じた。さらに、システム1のための教育とシステム2のための教育とは理念的なものであり、具体的な教育場面においては、2つの教育が分かちがたく絡み合いながら展開しているという見方を提示した。

本研究では、無意識的な感性・感情・情動が、従来の教育哲学研究において想定されていた以上に、教育目的としての自律に関わっていることを明らかにしてきた。人間諸科学において、現在、情動や感情に関する研究は大きな盛り上がりを見せており、情動のメカニズムやその発達、進化等についての知見は今後さらに積み重ねられていくことと思われる。特に、情動の発達に関する研究は、それを促す諸々のコミュニケーションについての理解も新たにするはずである。本研究は、今後発展が見込まれる子どもと大人のコミュニケーションに関する科学研究と、自律を目指す教育に関する(教育)哲学的研究とをつなぐ道を整備したという点において、教育哲学上の意義を有すると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮川 幸奈	4. 巻 -
2. 論文標題 自律を目指す教育に関する自然主義的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 (学位論文)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 宮川幸奈	4. 発行年 2022年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 288
3. 書名 自律を目指す教育とは何か 自然主義的な教育哲学の試み	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------